

<東北地区納税貯蓄組合連合会会長賞>

納税と生きる未来

福島大学附属中学校

3年 宍戸 愛理

私が福島市中学生派遣事業に参加させていただいたのは、昨年の秋のことです。10月8日から1週間ほどオーストラリアに滞在しました。初めて味わった海外の空気、経験したホームステイ、現地の学校の授業参加は私にとっても良い刺激を与えてくれました。5泊6日という滞在期間、その事業に参加し日本をとびだすのに費用はかかりませんでした。どうして、と思わず首をかしげてしまいそうになる事実。そこに関わっていたのが、福島市の税金や寄付金といった県や国の人々から集められたお金でした。この経験は、言うまでもなく私の国際交流に対する意識を変えましたが、同時に、人々から集められたお金を使うことがどういうことなのか深く問われたような思いにもなりました。そして、税金はその代表的なものであると捉えています。

現在、日本が巨額の借金を抱えていることは大きな経済問題となっています。数年で消えるものではなく、私たちの次の世代まで継がれてしまう可能性も否定することはできません。そんな中で税金によって海外派遣事業を企画していただき、参加できたことがどんな意味を持つのか。経済問題の背景と照らし合わせながら考えていきたいと思えます。

減らない借金の原因として挙げられているものの一つが高齢化による社会保障費の増加。ここには、尊い命を守ろうとする国民の意思があるように思います。だから、この支出はあるべきものなのです。

となると、私たちが考えるべきことはそこにかかる負担を減らしていく方法です。あ

るべきお金であっても、無駄に使っていたのでは、意味がありません。ですが、人々が無駄に気付くのはいつなのでしょう。私は、他と比較して初めて気付くものだと思います。他と日本を比べる、そのときに必要となるのがグローバルな視点であると考えています。今の日本で起こっている経済問題を原因から探り、解決法を考えたとき、必要になるものを私は海外派遣事業を通じて得てきたのです。一見つながりのない使い道のように見えるグローバルな事業と社会保障費という税金の使われ方。けれど、一つ一つの物事を整理して考えていけばどちらも私たちに必要なものであることに間違いはありませんでした。

平成26年4月1日、私たちが生活の中で負担する税率は8%になりました。これにより、日本が抱える借金は少しずつ減ってほしい、というのはあくまでも個人の希望的観測です。それでも、この時代を担っていく私たちがグローバルな視野をもつことで少しずつ日本は変わるのでしょうか。納税によって得るものにはすべて国民の意思と意味をもっているのです。大切な明日を守るため、税金の在り方を知しましょう。

納税は、未来の希望の種であると信じて。